国語

(45分)

1

次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。

かりに、「人間はその本性において善であって、その本質からいって善を為すように定められている。いろいろの悪事はその現象なのだ、だから人間は信頼していい存在だ。」と、だれかが証明してくれたとします。すると、善とは人間自身の生み出すもの、作り出すものではなく、むしろ、本性上、そうせざるを㋐エないもの、彼の存在から必然に出てくるものに過ぎないことになります。人間が善をおこなうのは、高いところにおかれた物体がささえをはずされれば必然的に落下するのと、変わりがないことになりましょう。それは、人間が信頼してまちがいのないものであることの証明にはなっても、それとともに、かんじんの人間における人間的なものが消えていってしまうのです。ですから、人間が本性からみて善であるとか、本性からみて悪であるとか、という人間の不変の本性を考えることは、私のいちばん気になる問題に関しては、必ずしも求めている答えを約束してくれるものではありませんでした。もしも、人間の本質を考えなければならないとしたら、その本質とは、人間は石と同じように物体であり、犬や猫と同じように生物であり、類人猿とも共通な感覚や知覚を持った心理の所有者であり、そしてそのうえに、悪魔のような恐ろしいことも、天使のようにきよらかなこともできる可能性をそなえた存在だという、ありのままの事実の中に求めなければならない。――私は、理論のうえでは、かなり㋑以前から、そう考えていました。そこで、「人間への信頼」を、その立場から考え直してみなければなりませんでした。

「［㋒］の人間的本性」を追うことをしばらく止めて、ありのままの人間から出発して見てゆくならば、人間の本質とは、矛盾のない純粋なものではなく、むしろ、人間がたくさんのヨウソ㋓を含み矛盾を孕んだ、世界中でいちばん複雑な統一だ、というところにしか見つけることはできません。そして、その矛盾のいちばん大きなものは、善を為す可能性と悪を為す可能性とを同時にそなえているという矛盾です。しかし、悪事をやろうとすればやれる能力もあり可能性もあるのに、それをやらないで正しい行動をとったからこそ、その行動は人間の行動であり、善い行動だといわれます。悪をもやれる自由のないところには、善をおこなう自由もありません。人間は卑劣なことをする可能性も、残虐なことをする可能性も、醜悪なことをやる可能性も持っているし、同時に、高貴な行動をとる可能性も、㋔ムシの親切をおこなう可能性も、みごとな行動をとる可能性も持っているのでした。そして、そのどれをも選べる自由を持っているということほど、人間的なことはないのです。

㋕善い意志ばかりが自由なのではなく、悪い意志も自由であり、その自由にこそ人間の人間らしさがあるとすれば、人間であるということは、たしかに恐ろしいことです。イヴァンのノートには、おそらく無限に記録がつづくことになります。しかし、その反面にまた、悪ばかりではなく、どんな善いことも、崇高なことも、美しいことも、同じように、この恐ろしい自由を通らずには、この地上に実現されはしないのです。この人間の自由だけが、人間の行為の善も、学問の真理も、芸術の美も、その他いっさいの価値を地上に生み出してゆきます。人間であるということは、こういう自由を持っているということ、無限といってもいい多くの選択の前に立っているということに、ほかならないのです。どんな選択を迫られるかは、私たちがどんな時代、どんな社会、どんな立場にいるかという、さまざまな状況によって異なるにしても、私たちはとにかく選択をやらなければなりません。そして、その選択によって可能性としての人間が、一刻一刻に現実の人間になってゆくわけです。

――「人間を信頼するか、どうか。」「人間を愛するか、どうか。」という問題は、矛盾した可能性を同時に持っているこの人間、その可能性の中から自由な意志で何かを選びとらねばならないこの人間、そして、現実からどんな選択を迫られても逃げることのできないこの人間、それをそのまま信頼するか、愛するか、という問題なのでした。

そのように考えてくると、信頼するか、しないか、愛するか、愛さないか、――これも私たちにとっての一つの選択だということになります。そうです。「人間はこんなばかなことをやるのだ。こんな醜悪なこともやるのだ。こんな悪魔のようなこともやるのだ。それでも、おまえは人間を信頼するかね。」という問いかけを受けて、「そうだ、信頼する。」と答えるか、「いや、できない。」と答えるかは、理由や証明にもとづいての帰結ではなくて、私の決意による選択の問題なのです。ソクラテスは、死ななければならないと考えたとき、決意して毒杯を傾けました。私たちにも、決意して傾けなければならない杯があるのでした。㋖それは、死ぬためではなく、おそらく人間として生きぬくために避けられない杯だと、私には思われました。

（出典　吉野源三郎「人間を信じる」）

㈱　イヴァン――『カラマーゾフの兄弟』の登場人物で人間不信を述べた。

① ――の部分㋐、㋓、㋔を漢字に直して楷書で書きなさい。

② 「㋑その立場」とはどういう立場か。文章中のことばを用いて三十字以内で書きなさい。

③ ［㋒］に入れるのに適当な語を文章中から漢字二字で抜き出して書きなさい。

④ 「㋕善い意志……自由であり」とあるが、「善い意志」とはどうすることをいうのか。文章中のことばを用いて四十字以内で書きなさい。

⑤ 「㋗どんな……しないのです」とあるが、どういうことを言っているか。その説明として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) どんな可能性も、人間がさまざまな現実に翻弄されるうちに選択の自由が奪われることによって、小さくなるということ。

(2) どんな自由も、多くの可能性をもつ人間が現実に直面して選択を余儀なくされることによって、失われるということ。

(3) あらゆる価値は、人間が無限の選択ができる自由の中で善きものを選択することによって、はじめて生まれるということ。

(4) あらゆる人間は、本質としてそなえている自由な選択の中で悪さえも経験することによって、本当の人間になるということ。

⑥ 「㋘それは……思われました」とあるが、筆者はここで、「私たち」はどうしなければならないと考えているか。七十字以内で書きなさい。

2

著作権者の許諾が得られ
次第掲載する予定です。

3

次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。

（亀が丘中学校の男子卓球部は、三年で部長の幸平と瀬倉、二年の小山、一年の拓と純太の五人で、倉庫で練習している。女子に勝てば体育館で練習できるという条件で、試合に臨んだが惜敗した。）

「いい試合だったね。みんな、力をつけたよ」

笑みを浮かべて、沢田先生は一人ひとりの顔を見た。

「でも、また、倉庫になっちゃいました」幸平くんが、力なく笑った。

「そのことなんだけどさ……」と、沢田先生は、言った。

「女子顧問の泉先生が、男子もがんばってきてるから体育館で練習したらどうかと言ってくださってるんだ。三台くらいなら出せる余裕もあるって言われてるんだけど」

ええっと、みんなが驚いた。

「ほんとですかっ」大声を上げたのは、小山くんだった。

「やったーっ。倉庫からの脱出だっ」

沢田先生は笑顔で、小山くんを見た。

「じゃ、あしたから……」と、沢田先生が言おうとした時、「あの、ちょっと、待ってください」と、幸平くんが口をはさんだ。

「ん？」と、沢田先生は、首をかしげた。

「一年生は、どう思ってんのかな」と、幸平くんが純太を見た。

「えっ？」と、純太はきょとんとした顔をして幸平くんを見てから、

「あ、ぼくも、賛成です」と、すぐに答えた。

「拓も、賛成？」と、幸平くんが、拓を見た。

「あ、はあ……」と、拓は［イ］。「ぼくは……」と、言いながら拓は考えた。さっきから、何かもやもやしている。もやもやというか、いらいらというか、うまく言葉にできないけれど、どうもおさまりのつかない気持ちが心の底にころがっていた。

幸平くんは黙ったまま、拓を見つめている。

ずいぶん考えてもまとまらないままに、拓の口に出たのは、「もっと、練習したい」という言葉だった。

みんなが、きょとんとした顔をした。

拓は口にしたその気持ちが、いま心の底にころがっているものだと気づいた。そして、言葉にしたら、その気持ちがより強くなった。とにかく、今、すぐにでも打ちたい気がした。あんな形で女子に負けたままでいるなんて、くやしいと改めて思った。一番負けたくない相手の亜美に負けてしまった。いや、負けたこと以上に、汗びっしょりかいて震えていた手で戦っていた亜美に対して、緊張のあまりかたくなって情けない卓球をしてしまった自分が腹立たしかった。

「練習して、もういっぺん、試合したいです」

床を見つめながら、今度ははっきり言った。

「うん……」と、幸平くんは静かにうなずいてから、「瀬倉、どうだ？」と、見た。

瀬倉くんは、前髪の中で口元だけがにやりとしていたが、「もう、いっぺん……」と、低い声で言った。

「おし、瀬倉、よく言った」と、言ったのは、マットの上の岩島さんだった。「負けたまんまでいるってのは、おれも性にあわねんだよな」

岩島さんの方は見ないで、幸平くんは、

「ぼくも、もう一度勝負して、ちゃんとした形で体育館に出たいと思ってる」と、自分の気持ちを言った。

「せっかく、女子がいいって言ってくれてんのにっ」

小山くんは、いらだった。

「あの、ぼく、どっちでもいいです」

純太は幸平くんと小山くんを交互に見ながら、小さな声で言った。

「あのさ……」と、幸平くんはみんなの顔を一人ひとり見て、静かに言った。

「おれたち、この三週間、変わってきたよな。今の気持ち大事にしていけばさ、きっとほんとにいい部になると思うんだ」

しばらく沈黙があった。

はああっと、深いため息を小山くんはついた。「じゃあ、いいよ。ぼくもがんばってみる」と、それだけ言って口を結んだ。

幸平くんはみんなの顔を見わたしてから、「よし。じゃ、決まりな」と言った。「来週、もう一回リベンジってことで、いいか」と、確認するように言った。

みんな黙ってうなずいた。

「先生、いいですか？」幸平くんは、沢田先生を見上げた。

沢田先生は、はっとしたような表情で顔を赤らめていた。「ごめん……」とつぶやいてから、「まちがうところだった……」と、かすれたような声で言った。

（出典　横沢彰「ふぁいと！卓球部」）

(注) 岩島さん――部員ではないが、よく倉庫に出入りする三年生。

① 「沢田先生は、首をかしげた」とあるが、このときの沢田先生の様子についての説明として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 幸平の異議をたしなめようとしている。
(2) 幸平の予想外の反応を不審に思っている。
(3) 幸平のさしでがましい態度を不快に思っている。
(4) 幸平の本当の気持ちを確認しようとしている。

② ［イ］に当てはまるものとして最も適当な慣用表現は、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 口ごもった　(2) 目をむいた　(3) 腹を括った
(4) 肩を落とした

③ 「床を見つめながら……言った」とあるが、このときの拓の気持ちをわかりやすく説明しなさい。

④ 「ぼくも……思ってる」からうかがえる幸平の気持ちを表すことばの組み合わせとして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 部長としての気負いと見栄　(2) 負けた悔しさと部員への怒り
(3) 女子卓球部への遠慮と嫉妬　(4) 自分の意地と部員への期待

⑤ それぞれの登場人物についての説明として**適当でない**ものは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 拓は、はからずも幸平の気持ちを代弁したかたちとなり、それをきっかけにして部員の気持ちがまとまっていった。
(2) 小山は、体育館が使えることを単純に喜んだが、幸平の部への思いを聞いて不承不承ながら頑張ろうと思った。
(3) 純太は、幸平の不用意な発言や小山と幸平の対立に心を痛め、なんとか穏やかに事が収まるよう配慮した。
(4) 幸平は、期するところもあったが、部長として皆の意見を聞いた上で最終結論を出した。

⑥ 「沢田先生は……赤らめていた」とあるが、先生は部員たちについてどういうことに気づいたというのか。わかりやすく書きなさい。